

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 佐野善作 高垣寅次郎共著 銀行論  |
| Sub Title        |   |
| Author           |   |
| Publisher        | 慶應義塾理財学会  |
| Publication year | 1916  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.10, No.6 (1916. 6) ,p.895(153)-   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 批評と紹介   |
| Genre            | Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19160601-0153">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19160601-0153</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

従つて長期貸借の利子歩合が企業資本の需用供給に依りて定まり、短期貸借の利子歩合は現金の需用に依りて決定さるゝものなりと爲すは謬見にして、兩者共に資金の需用供給に依りて定まるものなりとす。長期貸付歩合の變動が比較的緩慢なるに反し、短期貸付の利子歩合が往々頗る急激なるは資金の需用供給の程度が時々變動する事情に起因せる現象なりとす。即ち短期にせよ長期にせよ、利子歩合は略ぼ同率なるを原則とすれども、(註)資金の需用が平常に比して激増又は激減せば、長期短期共に貸付歩合は騰貴又は下落す可きも、其程度は短期貸付の方長期貸付よりも甚だし。如何となれば、資金の需用膨脹して利子歩合騰貴の徴候を呈しなば、長期借入を欲せし者は全く借入を延期するか或は短期借入を爲し、利子歩合の下落を待つ可し。されど、短期間資金を要する者は高率を辭せずして借入を行ふならん。果して然らば長期

貸借の利子は左程騰貴せざるに短期貸付の利子は暴騰することある可し。若し之に反して資金の需用激減して利子割合が低落の徴を呈しなば、資金の供給者は長期貸付を見合せ短期貸付を試む可し。果して然らば、長期貸付割合左程下落せざるに、短期貸付の割合のみが暴落することある可し。是れ兩者の間に時として著しき開きを生ずる所以なりとす。

註 此處に於ては假りに危険率皆無なるか、又は總ての貸借の危険率が同一なりと

看做せり。假りに然りとすも、短期貸付は殊に數日數週間と云ふが如き最短期の貸付の利子は長期貸付の利子よりも高率なり。如何となれば短期の貸付は長期の貸付よりも比較的貸手に於て多くの手数を要すればなり。但し此處に於ては極端なる長期と短期の貸付とのみを對照せるには非ずして、一般的に此兩者を比較せしに止まるなり。従つて手数料の差を稍々僅々に見積りたる。此手数料に就きては前々號拙稿「貸付利子歩合の解剖」を參照されし。

### 批評と紹介

佐野 著作  
高垣寅次郎 共著「銀行論」

大正五年四月 同文館發行  
菊版二百九十八頁正價一圓八十錢

本書共著者の一人佐野博士は明治三十六年中單獨にて「銀行論」を著述發表せられたるが、數年前之に一大改訂を加へて明治大學に於ける銀行論の講本として同大學出版部より上梓せられたり。爰に吾人の紹介せんと欲する「銀行論」は此講本に對して増訂を加へたるものなるが如し。講本は同じく菊版二百〇八頁なりしに、本書は二百九十八頁なるを以て、其分量は約五割増加せるなり。然りと雖も、章節の配合は兩者共略同一なるのみならず、新著の本文は講本の本文を全部其儘用ひたるものなり。新著が講本に比して紙類九十頁を増したるは隨處に歐米學者の學說を註解として挿載せるに因る。此

第十卷 (八九五) 批評と紹介

所謂引照該博にして豊富なる註解は多分高垣寅次郎氏の麗筆に成れるものならん。高垣商學士は一橋校に於て佐野博士の後を襲ひて銀行論の講座を擔任せられつゝありと云ふ。氏漢に「銀行集中論」を著し銀行論に對する造詣の淺からざるを示されたるが、今又舊師の著書に有益なる註解を施し共著書として之を發表せらる。舊師の信認の厚き想像するに難かず。吾人は殊に高垣氏が註解中に於て多くの史實統計を引用して本文中に於ける所説を論證することに努められたるを欣ばざるを得ず。

本文の内容に至りては吾人は特に此處に紹介批評するの要を見ず。蓋し佐野博士の「銀行論」世に行はるゝこと十數年にして既に定評あるを以てなり。唯一言注意するに値するところは博士の「銀行論」は商業銀行のみを論述せるものにして他種の銀行例へば中央銀行、勸業銀行等を除外せるの一事ならんか。又本書には卷尾に歐米の參考書を載せたり。

### 社會政策學會論叢 第九冊

大正五年四月 同文館發行  
菊版二百九十九頁正價一圓二十錢

第六號 一五三